

公益社会法人 日本左官会議が主催する、フォーラムに参加してきました。

「伝統構法」のユネスコ無形文化遺産登録をめざす運動の一貫で、緑の列島木の家スクールや伝統木造技術文化遺産準備会などが共催のフォーラムで、元文化庁の方から左官職人さんまで、幅広い方々の講演会でした。

「**伝統構法**」とは、下記の技術とその職人を育成してきた**総体**で、この保護継承をはかる運動ということでした。

- ・職人技術(大工、左官工、屋根葺師など)
- ・素材生産技術(木や土など)
- ・道具を作る技術(のこぎりやコテなど)

今回は、たくさんの職種の中から、左官工に特化し、開催されたものでした。

中村昌生氏は待庵などの草庵茶室の室床の塗廻しの事や、中柱の大黒柱的な重要性、中柱にとりつく袖壁による中柱の見え方やチリ際の大切さのお話しをされていました。

日本左官会議の原田氏(議長)・挾土(はさど)氏は、左官職人で、原田氏は近所の山の土をふるいにかけて、あらゆる種類の荒さの土を作り、自作の米からワラを作り、左官仕事をされているそうです。一方の挾土氏は、建築家の隈研吾氏の依頼により、ニューヨークで現地の土を使った土壁を塗ったり、コテ使いによる立体絵画の個展を開いてしまう芸術家に近い左官職人でした。大工と左官は一体のもの、柱の木目から大工の見せたい空間を読み取り、それに合わせて土壁の仕上げの荒らさや風合いを決める、いい土を見つけるとヨダレが出る、など職人さんの心の中の話が特におもしろかったです。(挾土氏の個展では作品の下に製作中の気持ちを詩にして展示し好評だったそうです。)

中村昌生氏の話が聞きたいと思い参加しましたが、左官職人の方の思いの詰まった講演会に、とても感激しました。

最後のパネルディスカッションでは、後継者・若者の話ができました。やりたいと希望してくる若者は今でもいて、人材が途絶えることはなさそうですが、土壁の使用物件がなく、材料がなくなっていく危機的状況、というお話しと共に、そこにある土で作ればいいんだよ、というお話しがありました。

150名近くの参加者で、参加者で設計者の方は図面に「土壁」と書いてくださいとのことでした。(黒野晶大)



フォーラムの様子



挾土氏の作品①



挾土氏の作品②



パネルディスカッションの様子

#### プログラム

- 13:30 開会 総司会 宇野勇治  
基調講演 中村昌生 数寄屋建築における左官仕事の美  
講演 後藤 治 文化財建造物における左官の位置づけ  
講演 挾土秀平 海外で評価を得る日本の左官
- 15:20 休憩  
講演 原田 進 日本の左官技術は何が特別なのか  
講演 大江 忍 ユネスコ無形文化遺産への道のり
- 16:30 パネルディスカッション 司会 大江 忍  
中村昌生・後藤治・原田進・挾土秀平・川口正樹
- 17:10 質疑応答  
17:30 閉会

昭和11年、飛騨高山での土蔵づくり

#### 日本左官会議フォーラム

### 無形文化遺産をめざす、 伝統構法と左官技術 一意義と課題

大工や左官といった職人によって結実した、伝統建築をつくる技術。それは日本の歴史や風土、精神や文化と大きく関わっています。このかけがえのない技術と職人の未来をつくるために、「伝統構法をユネスコ無形文化遺産に」という運動が始まっています。今回は左官に力点を置いて、伝統構法およびこの運動の意義と課題を考えます。

